

山口明子

すずしき標しほえん

本歌集を、「自然」というキーワードで、四つの視点から論じていきたい。

一つ目は、隠喩で自然を描写する力である。
・みづ選り積雲光り八月のうみ孔雀青得て完結す

「みづ選り」とあるので、曇りから晴れになり、積雲にも光が射す情景が目には浮かぶ。そこに「孔雀青」を加えることで、鮮やかな真夏の海が読者の脳裏にぼつと広がる。直喩を使わず、隠喩でストレートに表現することで、より一層写実的な作品に仕上がっている。「短歌」というスケッチブックに「言葉」でデッサンする作者の力を読みとることができるのである。

二つ目は、自然と一体化し、自然から詠む作者の感性である。

・青く濃き虧かへい盈えいたたえて潮動く嫩潮わかしほ小潮我の中まで

四句目まで読むと、紺青の海に潮が激しく渦巻く様子を想像するが、結句で、それは作者の内部にまで浸透していることがわかる。作者の、繊細でかつ激しい心情を、自然を通して描き出すことに成功している。

三つ目は、五感の想像力の豊かさである。
・芒野の冷気に総身差し入れて半音階の月のこゑ聴く

・しばらくは空の裾野に立ち入りて夕映え匂ふ杏を摘まな

・猫の仔の夢の深野の晴れをらむ柔き背そむぢに陽の匂ひ頭つ

二つ目の視点でも述べたように、一首目は「芒野」と、二首目は「空の裾野」と作者が、一体化している。そして一首目では、「月のこゑ」を聞き、二首目では、夕映えの匂いを感じ取っている。さらに三首目では、昼寝する仔猫の「背」に射す「陽」から、仔猫が夢に見る風景の明るさを感じ取っている。三首とも聴覚、嗅覚、視覚などの想像力を働かせて詠んでいる。聞こえない自然の声を聞き、匂わないはずの匂い

を感じ取り、見えない自然の事物を見つめている。この作者の感性こそが、幸綱先生が帯に書いた「作者のなみなみならぬ歌の才能」なのではないか、と思う。

四つ目は、「自然の光」を「標」と捉える視点である。

・すがれ野のくちなはの殻月を容れ微光ひかりすずしき標しほえんとなりぬ

・密閉の部屋むくはの多なる白桔梗月光ひかり近き方かたよりひらく

そのまま読んでも美しい自然詠であるが、「くちなは」や「白桔梗」は、作者の心情の隠喩とも読める。闇の中、作者を導くのは、「人」ではなく「月の光」なのである。アニミズムを感じ取り、自然と共に生きる作者の姿を読み取ることができる。

以上のことから、『森林画廊』とは、作者が今まで生きてきた人生を、自然をモチーフに詠み、それらの作品群を、「歌集」という「画廊」にまとめたものであると考えられる。近代短歌以降の「日常や現実の我を詠う」という詠み方から立脚し、現代歌人の我々に「すずしき標しほえん」を新しくもたらしめてくれる一冊である。